

虚構の語りと言語行為論

田 村 均

- 1 はじめに
- 2 ジョン・サール「フィクションの論理的身分」について
- 3 デイヴィッド・ルイス「フィクションの真理」について
- 4 グレゴリー・カリーの虚構論について
- 5 むすび

1 はじめに

本論文の目的は、言語行為論による虚構の語りの説明理論を分析し、評価することである。私たちは、毎日、言葉によって何かを描写したり、約束したり、頼んだり、命令したりして生活している。これらの多様な語り方のなかで、虚構の出来事を語るということは、いったいどのようなにして成り立っているのだろうか？ この問題は、ジョン・サールがまず取り上げ（Searle 1979）、さらに、サールを批判しつつグレゴリー・カリーによってコミュニケーション論の方向に展開されることとなった（Currie 1985；Currie 1990）。本論文では、主としてこのサールとカリーの虚構論を検討する。どちらの虚構論においても、それぞれの説明の核心部に登場する「フリをすること（pretence）」あるいは「ゴッコ遊びにおけるように信じること（make-believe）」といった概念が、議論の内部では説明しきれない根本的な前提として残ってしまうことが確認される。言語行為論はこれらの前提を浮かび上がらせるが、それを分析する役には立たないと評価される。

言語行為論による説明のほかに、虚構の成り立ちを解明する有力な手法として、ルイスの可能世界意味論による分析が存在する（Lewis 1983）。ルイスの意味論的な分析は、話し手の言語使用の局面からではなく、言語体系と事実との対応関係という局面から虚構の言説の成り立ちを解明しようとしている。この手法が成功するのなら、話し手の言語行為やコミュニケーション意図といった語用論の水準は無視して、記号と世界の対応構造という意味論の水準で、虚構とは何なのかが定められることになるだろう。真理条件によって意味が分析できると見なされるように、虚構の真理の諸条件によって虚構の語りの意味が分析できると期待されるわけである。ところが、ルイスの理論は、本質的な部分でサールの虚構論を取り入れないと成り立たない。ルイスの場合も「フリをすること」という語用論的な水準の概念が必要不可欠であることが判明する。このルイスの理論をめぐる問題は、本論文ではサールからカリーに移行する途中で、言語行為論とは

別の可能性の吟味として取り扱われる。

本論文においては、最終的に、「フリをすること」や「ゴッコ遊びにおけるように信じること」という現実と虚構の二重性を踏まえた心的態度が、虚構の語りを可能にする基盤であることを確認する。この確認は、言語行為論の立場から虚構を分析して行くと、これらの心的態度がいわば原始概念 (a primitive notion) として残ってしまうことを見出す、というかたちで生じる。従って、本論文は、ケンドール・ウォルトンの「諸々の言語行為論は虚構を説明する上で著しく役立たずであることが判明するだろう (Walton 1990, 76)」という言葉を書き添えるものである。ウォルトンは、「これらの理論はその核心において誤っている (Walton 1990, 84)」と指摘している。核心における誤りとは、「虚構が“真剣な (serious)” な語りに寄生しているという考え方 (ibid.)」にはほかならない。言い換えれば、「断定し、問いを立て、命令を発するといった虚構でない言語の特性となっている活動に基づいて、言語や絵などの虚構における使用が理解できるはずだ、という考え方 (ibid.)」が基本的な誤りなのである。

おそらくウォルトンの言うとおり、虚構は、現実寄生しているのでも、現実から派生するのでもないだろう。現実と虚構は、相互に対照されることによってそれぞれが定義されるような、等しく根源的な一対の概念であると予想される。本論文は、言語行為論という経路をたどって、この予想に到るまでの経過の報告という意味を持つ。

以下2では、サールの虚構論を分析し、その議論においては「フリをすること」が何をどうすることなのか不明瞭なままにとどまることを見出す。

3では、ルイスの可能世界論による虚構の真理の理論を分析し、その理論の出発点で「フリをすること」が決定的な役割を果たしていることを確認する。「フリをすること」の解明がないかぎり、ルイスの虚構論は基礎が危ういと言わざるを得ない。

4では、カリーのコミュニケーション論的な虚構の理論を分析し、ゴッコ遊びにおけるように信じる (make-believe) ことを求める話し手の虚構制作の意図が、そのゴッコ遊びへの聞き手の能動的な参加を待って初めて虚構世界の構築に成功するということを見出す。

5では、むすびとして、話し手と聞き手が共通に踏まえている虚構生成の作法として、ゴッコ遊びにおけるように信じるという心的能力が根源的なものとして浮かび上がることを確認する。

2. サール「フィクションの論理的身分」について

ジョン・R・サールの「フィクションの論理的身分」¹は、虚構²を語ることに関するその後の

¹ John Searle, The logical status of fictional discourse. *New Literary History* 1974-5, Vol.VI, pp.319-332. なお、以下での同論文からの引用はすべて Searle 1979, pp.58-75 による。

² 本論文では、基本的に“fiction”の訳語として多くは「虚構」を用い、ときに「虚構作品」を用いる。ただし、邦訳文献の表題や引用文中で「フィクション」が用いられている場合には、それをそのまま用いる。

言語哲学的、藝術論的な議論の一つの準拠枠となった。サールはこの論文（「サール 1979」と略記する）において、アイリス・マードックの小説の一節を引き、「引用された一節において、マードックは正確には何をしているのだろうか？（Searle 1979, 64 / 邦訳 106）³」と問う。これは、小説を書く——より一般的には虚構を語る——という言語行為はいったい何をどうすることなのか、という問いである。これに対するサールの回答は「虚構作品の作者は、一連の発語内行為を遂行するフリをしている（pretend to perform a series of illocutionary acts）。（Searle 1979, 65 / 邦訳 107）」とするものであった。サール 1979 の虚構論は、彼が『言語行為』⁴（「サール 1969」と略記する）で展開した理論を背景とする。以下、適宜サール 1969 から論点を補って、サールの虚構論を検討する。

2.1 サール 1979 の概要

サール 1979 は、言葉を話したり書いたりすることは「発語内行為（illocutionary acts）」を遂行することだ、という点の確認から始まる。発語内行為とは、断定する、質問する、約束する、命令する、詫げる、感謝する等々のコミュニケーション上の働きかけを、言語を用いて行なうことである。しかしサールの考えでは、虚構を語ることはこういう発語内行為の一つの類型とは見なされ得ない。つまり、物語る（telling a story）といった発語内行為の一類型があるという考え方は成り立たない⁵。そうではなくて、小説における情景描写などの虚構の語りは、ある事実を断定する（assertion）という発語内行為を遂行するフリをすることだ、と言うのである。なお、虚構の語りの中には断定以外に約束や命令や質問のフリをすることも現れるが、サールは、さしあたり何かがかじかであるという描写、つまり断定の語りに議論を限定しているので、以下でもそれを踏襲することにする。

サールはアイリス・マードックの作品から、次の一節を例に引く。

「馬ぬきの輝かしい暮らしがあと十日だ。名高いエドワード王騎兵連隊勤務を命じられて間もないアンドリュウ・チェイス＝ホワイト少尉は、1916年4月のあるあたたかな日曜日の午後、ダブリン郊外の庭園を満ち足りた様子でぶらつきながら、そう考えた。（Searle 1979, 61 / 邦訳 101）」

この一節は虚構の語りの中に出現しており、その限りで、「アンドリュウ・チェイス＝ホワイト」なる特定の人物が実在するか、その人物が特定の日にある庭園をぶらつくという事実が現実世

³ 引用は基本的に拙訳である。邦訳のある文献については、適宜それを参照させていただいたので、「/」の後に「邦訳」としてそのページ数を記載する。ただし、訳文はしばしば一致しない。

⁴ John R. Searle, *Speech Acts*. Cambridge University Press, 1969.

⁵ なお後述するが（4.1）、グレゴリー・カーリーはこの点でサールを批判する。

界に生じたとか、そういったことを私たちに告げているわけではない。たしかに、想像をたくましくすれば、まったくの偶然で現実にそういう名前の人物がいて、そういう行動をとったことが現実にあった、ということも絶対には言い切れない。だがこの一節は、そういうことが有ったとか無かったということ——事実の断定として真または偽であるということ——に、そもそもまったく関わりがない。そうではなくて、そういう名前の人物がそういう行動をとったことが現実にあったと断定するフリをしているだけなのだ、とサールは言う。

「マードックは、断定をするフリをしている (pretending to make an assertion) のだと言えよう。あるいは、断定しているかのように振る舞っている (acting as if she were making an assertion)、断定するという動作をやってみせている (going through the motions of making an assertion)、断定する真似をしている (imitating the making of an assertion) などとも言えよう。(Searle 1979, 65 / 邦訳 106)」

このように、「フリをする」、「かのように振る舞う」、「動作をやってみせる」、「真似をする」といった言い方はほぼ同義と見なされ、これらは「フリをする pretending」で代表される。言うまでもなく、この場合「フリをする」といっても、「にせ医者には医者フリをする」といった用法とは異なり、他人を欺く意図はない。

2.2 断定と断定するフリ

問題は、欺く意図なく断定するフリをするとは、いったい何をどうすることなのか、ということである。これに答えるには、断定すること (assertion) がどういうことなのか、あらかじめ明らかにしておく必要がある。サールによれば、断定するとは以下の4つの規則に合致するかたちで遂行される発語内行為である。

- 「1. 本質規則：断定を行なう者は、表現された命題が真であるという立場に自分自身コミットすることになる。
2. 事前規則：話し手は、表現された命題が真であることの証拠ないし理由を提出できる立場にある。
3. 表現される命題は、発話の行なわれる際の文脈において、話し手および聞き手の両方に対して、真であることが明白であってはならない。
4. 誠実性規則：話し手は、表現される命題が真であると信じるという立場に自分自身コミットする。(Searle 1979, 62 / 邦訳 101-102)」

最初に規則全体の位置づけを確認しておく、これらの規則はサール 1969 で、構成的規則

(constitutive rules) と呼ばれている種類の規則である。規則には、テーブルマナーの規則のように、「規則に先行して、または規則から独立に存在する行動の型を統制する (Searle 1969, 33 / 邦訳 58)」タイプの規則と、「たんに統制するだけでなく、新しい行動の型を作り出したり定義したりする (ibid.)」タイプの規則の二つがある。テーブルマナーの規則が無くても、物を食べるという行動は存在するが、チェスの規則が無ければ、チェックメイトという行動は存在しない。テーブルマナーの規則は統制的規則 (regulative rules) の例であり、チェスの規則は構成的規則 (constitutive rules) の例である。(Searle 1969, 33-34 / 邦訳 58-59)

上の4つの規則によって、コミュニケーション上の行為として、断定するという種類の発語内行為が作り出され、定義される。これらの規則が成立していなければ、つまり当該言語の使用者たちに共有されていなければ、断定するという行為は存在しない。サールによれば、「ある言語の意味論的な構造とはその根底にある一連の構成的規則群の慣習的な実現形態であって、言語行為とはこれらの構成的規則群に従って表現を発することによって遂行される行為 (Searle 1969, 37 / 邦訳 64)」なのである。ここに言う「意味論的な構造」とは、単に発話された文の真理条件だけに関わるものではなく、他人に対してどういう立場を取るか(上の規則1)、自分がどういう情報をもっているか(上の規則2)、相手の知識状態をどのように洞察するか(上の規則3)、自分がどういう信念状態にあるべきか(上の規則4)といった、多岐にわたる事実と心理の構造を指している。

また、この断定の4規則は、日本語に移しても概ねそのまま通用することから分かるように、言語が異なってもほぼ同じ形で成り立つ。約束、命令、質問、謝罪、感謝等々の構成的規則も、異なる言語において相当程度共通であろう。「人間のさまざまな言語は、それらが相互に翻訳可能である範囲において、同じ根底的な規則の異なった慣習的实现形態であると見なすことができる。(Searle 1969, 39 / 邦訳 69)」サールの考えでは、さまざまな自然言語において誰かが何かを意味する (to mean) という現象が成り立つのは、人間社会に共通する上記のような諸規則によって支えられた社会的な事象としてである。

次にそれぞれの規則を見てみると、まず、1に挙げられる本質規則 (the essential rule) とは、或る発語内行為が何をすることなのかを端的に述べるものである。断定の本質規則のカナメの部分に出現する “commit oneself to ... (…という立場に自分自身コミットする)” という動詞句は日本語に移しにくい。非英語圏での使用を念頭においた或る英英辞典の語義解説を見ると、「If you **commit** yourself to a course of action, you decide that you will do it and you let people know about your decision. ⁶ (あなたが或る行為に **commit** するならば、あなたはそれをすると決め、そう決めたことを他人に分かるようにすることになる)」とある。「何かに自分が commit する」とは、少なくとも、何かに人知れずたずさわるのではなくて、他人にはっきり分かる形で

⁶ コリンズコウビルド英英辞典の「commit」の項目3。非英語圏での使用を念頭に置いているという点については、同辞典の Introduction, Geographical Variety, (p.XX) の記載を参照のこと。

何かをすることであるらしい。この理解に沿って上記の本質規則を言い換えれば、断定するとは、話し手が、聞き手にはっきり分かる形で、聞き手に対して、自分の言ったことは真であるという立場を明示的に打ち出す、ということになると思われる。

次に挙げられる事前規則 (the preparatory rules) は、2 だけではなく 3 も含む。サール 1979 の表記の仕方はやや紛らわしいのだが⁷、サール 1969 の「約束する (promise)」の分析を参照すると、言う必要のない明白なことの発話は不適切だという 3 に対応する内容は、事前規則の一つとして扱われている。すなわち、「約束する」の事前規則は、約束された事柄は実行されないより実行される方が聞き手にとって好ましいという規則と、約束された事柄が実行されることは、話し手と聞き手の双方にとって発話以前に明白であってはならないという規則の二つが挙げられている (Searle 1969, 63 / 邦訳 113)。事前規則の 3 は、真であると分かりきっていることを言っても、断定することにはならない、という点を確認するものである。これは会話場面での発話の適切性に関わる語用論的な規則である。

2 の方の事前規則は、たんに強く主張することと断定することとを区別するものであり、発話内行為の分類に関わる意味論的な規則である。2 の趣旨は、個人的な考えをいかに強く言い表したとしても、話し手⁸ が、それが真であることの証拠または理由を提出できないならば、その発話は強い思い込みの表明に過ぎず「assertion」とは呼べない、ということである。例えば、ある人が「今後 1 年以内にすべての核保有国が自らの保有する核兵器をすべて廃棄することになる」と情熱的に語ったとしても、語り手が客観的な証拠や理由が提出できるのでなければ、これは希望的観測にすぎず、断定 assertion とは認められないということになる。⁹

誠実性規則 (the sincerity rule) は、一般にさまざまな発話が話し手の心的状態の表出と見なされるというコミュニケーション上の事実を成り立たせる規則である¹⁰。断定の場合、話し手は自分が断定する命題を信じていなければならない。自分の信じていない命題を断定的に表出すれば、

⁷ 原文では「2. The preparatory rules: the speaker . . . / 3. The expressed proposition . . . (イタリックは引用者)」というように複数形「rules」で表記されているから、2 と 3 の二つが事前規則であることは、英語圏の読者には紛らわしくないだろう。

⁸ なお、サール 1969 では、断定にかかわる事前の条件の一つが、「断定に関しては、事前条件には、聞き手が断定された命題を真であると信じるなんらかの根拠を持っていなければならないという事実が含まれ…… (邦訳 116、傍点は引用者)」となっている。原文は「For assertions, the preparatory conditions include the fact that the *hearer* must have some basis for supposing the asserted proposition is true, . . . (Searle 1969, 64 イタリック体は引用者)。これでは議論の筋が通らず、理解不能なのだが、サール 1979 の上記事前規則を参照すれば、サール 1969 の「聞き手、the hearer」は、「話し手、the speaker」の誤記であると判定できる。

⁹ 筆者の語感に従うと、日本語の用語法としては、この種の希望的観測の強い表明を「断定」と呼ぶことは必ずしも不可能ではない。この点は日本語の「断定」と英語の「assertion」の違いかもしれない。

¹⁰ 「誠実性条件によって特定される心理の状態が存在するときはずねに、その行為の遂行がその心理状態の表現であると見なされる。この法則は、その行為が誠実なものである場合でも、また不誠実なものである場合でも成立する。……この第一の法則の逆は、その行為が心理の状態の表現であると見なされる場合のみ、不誠実ということが可能となる、という法則である。(Searle 1969, 65 / 邦訳 116-117)」

それは不誠実な行為となる。断定の本質規則は、既に見たように、話し手が聞き手に対して自分の表現した命題は真であるという立場を明示的に打ち出すことだった。本質規則は、一般に言語行為が他人に向かうコミュニケーション行為であるために、話し手が聞き手に対してどういう態度をとるかに重点をおいた規則になる。これに対し、誠実性規則は、話し手が自分の中でとる態度の方に重点がある。断定の場合、聞き手に向けて発話した命題が真であると信じるという立場を自分に対して——つまり自覚的に——とる、ということである。

以上をまとめれば、断定するとは、真であることが必ずしも明白ではないが〔規則3〕自分は真であると信じている事柄〔規則4〕を、その証拠や理由が提出できることが想定される状態で〔規則2〕、他人にはっきりと明示的に提示する〔規則1〕、という言語行為であると言えるだろう。

それでは断定するフリをするとはどういうことなのだろうか。この点についてのサールの説明は、以下に見るように、カナメの部分に「垂直」「水平」といった比喩的な言い回しが用いられているため、期待されるほど明快ではない。

サールは、まず断定に関する上の4つの規則について、「これらの規則は語（ないし文）を世界に関係づける規則（Searle 1979, 66 / 邦訳 109）」であるとする。そして、これらを「言語と実在（reality）との結び付きを確立する垂直規則（vertical rules）（ibid.）」と呼ぶ。他方、「虚構を可能にするのは、先述の〔上記4つの〕規則によって確立される語と世界との間の結び付きを破る、言語外的で非意味論的な一群の慣習規約（conventions）（ibid.）」である。サールは、この慣習規約を、「垂直規則により確立される諸連関を破る水平規約（horizontal conventions）の集合という形で考える（ibid.）」と述べる。水平規約は、「言語に属する語や他の諸要素のどれについても、その意味を変化させたり、交替させたりするものではない。（ibid.）」そうではなくて、「むしろ、話し手が語をその言葉どおりの意味を保持したままで、しかもその意味により通常要求されるコミットメントを引き受けずに使用することを可能とするもの（ibid.）」であるとみなす。以上をつづめて言えば以下の通りである。

「諸々の発語内行為を遂行するフリをすること（the pretended illocutions）は、これが虚構の作品を構成するのだが、発語内行為と世界とを関係づける諸規則の通常の働きを停止させる（suspend）一群の慣習規約の存在によって可能になる。（Searle 1979, 67 / 邦訳 109）」

この水平規約の、言語と世界との通常の結び付きを停止する作用こそ、虚構を語るとは何をどうすることなのかを明らかにする上で、説明のカナメの位置を占めるものである。読者としては、この水平規約がどのようにして垂直規則の働きを停止するのかをぜひ知りたいと感じる。ところが、上の指摘に続くサールの問いは、「語り手が水平規約を発動する際のメカニズムはどのようなものであろうか？（Searle 1979, 67 / 邦訳 110）」というものである。サールは、どうい

メカニズムで水平規約を発動することができるのかは問うのだが、発動された水平規約がどういうメカニズムで作用するのかは中心問題としない。確かに、サールは何かのフリをすることの一般的な説明を与えてはいる。曰く、誰かを殴るフリをすることは腕や拳を特徴的な仕方で動かすことによって遂行される。「人を殴ることに關しては、そのフリがあるだけなのだが、腕や拳の動きは実在的である。(Searle 1979, 68)」曰く、子どもは現実に運転席に座ってハンドルやレバーを動かすことで、停まっている車を運転するフリができる。一般的に言えば、低次の具体的行為を実際に行なうことで、高次の抽象的な行為を遂行するフリをすることが成り立つ。そういうわけで、「同じ原理が虚構を書くことにもあてはまる。書き手は、現実に文を発話する(書き記す)ことによって、発語内行為を遂行するフリをすることができる。(ibid.)」

これは要するに、書き記す行為は実在するが、それによって通常遂行される発語内行為は成立しておらず、行為のフリがあるだけだ、ということの繰り返しにすぎない。虚構を語るとは或る発語内行為を遂行するフリをすることだ、という既出の論点から、ほとんど一歩も出てはいない。サールは最終的に「発話にともなう、通常の発語内行為へのコミットメントを保留する水平規約を発動する意図をもって発話行為を遂行すること(Searle 1979, 68)」によって、発語内行為のフリをすることが成立すると結論する。水平規約を発動する「意図をもつ」ことが必要だという条件が追加されるだけで、ここでもコミットメントを保留する作用の成り立ちについては何も語られない。だから、「水平規約を発動する意図」が実際に何をどうする意図なのかは判然としない。

2.3 フリをすることと虚構の中の真理

サールの言うように、断定することが一群の構成的規則によって作り出されるのなら、断定するフリをすることも同じようにして作り出されると想定してもよいだろう。私たちに必要なのは、断定するフリをすることの構成的規則群である。

そこで、試みに断定の規則群に手を加え、断定するフリをすることの構成的規則に書き換えてみる。やり方はまったく単純で、基本的に、上記の4つの規則に現れる「真である」という部分を「その虚構において真である」に変更するだけでよい。そうすると、以下の4つの規則が得られる。なお下線は断定の4規則から改変される部分を示している。

- 1' 本質規則：断定するフリをする者は、表現された命題がその虚構において真であるという立場に自分自身コミットすることになる。
- 2' 事前規則①：話し手は、表現された命題がその虚構において真であることの証拠ないし理由を提出できる立場にある
- 3' 事前規則②：表現される命題は、発話の行なわれる際の文脈において、話し手および聞き手の両方に対して、その虚構において真であることが明白であってはならない。
- 4' 誠実性規則：話し手は、表現される命題がその虚構において真であると信じるという立場に自分自身コミットする。

1'～4'の規則は、断定するフリをすることを特徴づける規則になりうる。だがもちろん、虚構を語ることを特徴づけるためには役に立たない。なぜなら、虚構を語るとは、言語行為を遂行するフリをすることであり、それはその虚構において真であるということに関わる規則に沿って語ることだ、と言ってみても、説明項と被説明項の両方に虚構という言葉が現れて、あからさまな堂々巡りになるだけだからである。

しかし、虚構における真理を虚構やフリという概念を使わずに特徴づけることができるなら、1'～4'の4つの規則は虚構の特徴づけとして有効になる。虚構における真理の概念は、デイヴィッド・ルイスの論文「フィクションの真理」¹¹の主題である。以下、同論文を検討する。

3. ルイス「フィクションの真理」

3.1 内包的オペレーター

デイヴィッド・ルイスは、「フィクションの真理」において、虚構という問題に言語行為論ではなく真理論から接近する。サールは語り手の言語行為に着目して虚構を特徴づけようとした。サールの関心は、断定の構成的規則群から分かるように、語り手の心的状態や態度と言語との関係に向かっている。これに対し、ルイスの関心は、言語と世界との関係に向かっている。サールが導入した水平規約の働きは、言語行為と世界とを結びつける垂直規則の働きを停止させることであった。それゆえ、ルイスのように言語と世界との関係から虚構を特徴付けることができるのならば、私たちは、サールの言う水平規約の働き方をうまく把握できるかもしれない。

ルイスは、指示対象を欠く（ように見える）固有名という伝統的な問題を取り上げる。ホームズ物語を幾つか読んでいれば、誰でも「シャーロック・ホームズはベーカー街221Bに住んでいた」という文は真であると言いたくなるが、「シャーロック・ホームズは家庭を大事にする人だった」という文は偽であると言いたくなるだろう。だが現実の世界を念頭に置いてこれらの文の真偽を考えるなら、固有名「シャーロック・ホームズ」によって指し示される人物は現実の世界には存在しないから、どちらの文も偽であるか、あるいは真理値を欠くと見なされるほかない。ルイスによると、マイノン主義はこの問題への一つの対策ではありうる。だがマイノン主義には、架空の存在者の属性について、あるいは量化について、それ固有の困難がある。ルイスは、それよりずっと単純な方法として、次のような解決策を提案する。

それは、「虚構中の登場人物についての記述を文字通りに受け取るのではなく、“しかじかの虚構の中で (In such and such fiction) ……”というオペレーターで始まる長い文の省略形であると見なす (Lewis 1983, 262 / 邦訳 164)」という案である。確かに、「シャーロック・ホームズはベーカー街221Bに住んでいた」と言うとき、私たちは「コナン・ドイルのホームズ物語では、

¹¹ David Lewis, Truth in Fiction. In David Lewis, *Philosophical Papers Volume 1*, Oxford University Press, 1983, pp.261-280. 邦訳は、『現代思想』1995年、第23巻04号 pp.163-179所収。

シャーロック・ホームズはベーカー街221Bに住んでいた」ということを言いたいのだ、というのは首肯できる考え方である。

この提案によると、今 f なる物語にかかわるある文を「 ϕ 」と表記すれば、文 ϕ は、「物語 f において、 ϕ 」という文の縮約形とみなされることになる。ただし、「 f なる物語にかかわるある文」とは、物語の中に出現する文と、物語に関して語られる文の両方をいうものとする。すなわち、「吾輩は猫である。名前はまだ無い」は『吾輩は猫である』に出現する文であるが、「その猫は苦沙弥先生という教師の家に飼われていた」は『吾輩は猫である』に関して語られる文である。

この「物語 f において、……」というオペレーターは、内包的オペレーターの一種であって、可能世界への限定された量化によって分析される。

「[物語 f において、 ϕ] というオペレーター付きの文が真であるのは、 ϕ が、ある集合に属するすべての可能世界の中で真であるとき、またその時のみに限る。この場合、そのような集合は、何らかの仕方で物語 f によって決定される。(Lewis 1983, 264 / 邦訳 166)」

これは特に新奇なことを言っているわけではなくて、直観的に言えば、 ϕ が成り立っているような世界があつて、そういう世界を物語 f が描き出している、というだけのことである。例えば、「吾輩は猫である。名前はまだ無い」という文が成り立つ世界を、漱石の『吾輩は猫である』は描き出す。これは小説のごく普通の読み手がみな理解していることである。

3.2 物語世界の取り出し方

大事なのは、物語 f の決定する世界をどうやって取り出すのかという問題である。虚構を語ることがある物語世界を作り出すことだとすると、語られた文に即して物語の世界をうまく取り出すやり方があれば、そのやり方は、文と現実の世界を通常の発話において結びつけている「垂直規則」の働きを、一時停止させる手続きを含んでいると想定できる。

物語世界を取り出す最も素朴なやり方は、物語 f の筋書きどおりに出来事が起こっている世界を選び出す、というものである。つまり、「シャーロック・ホームズ物語で真であることは、その場合、ホームズやワトソンやその他の登場人物について記されている属性や関係を備え、しかるべき行動をとる人物が存在する可能世界のすべてにおいて真であること (Lewis 1983, 264 / 邦訳 166)」である、と定義するわけである。

しかしLewisは、このやり方ではうまく行かないと指摘する。第一に、この手続きは循環の恐れがある。というのも、そもそも物語とは、いつどこで何があったのかということの列挙によって作り上げられているわけではない。私たちは、物語の記述から、その物語世界においてはいつどこで何があったのかを判定し、それらを連結して筋書きを構成し、その物語の成り立つ世界を

取り出している。この作業は、物語を構成するどの文がその世界で本当に起こったことを表しているのか、逐一吟味する形で行われるだろう。だが、それならば、この段階ですでにその世界で本当に起こったこと、つまり物語世界における真理という概念の理解が前提されていることになる。可能世界の抽出はそれを利用して行なわれている。だから、物語の筋書きに合う世界を取り出す手続きは、「今まさに我々が探求しているフィクションにおける真理という概念に精通していることを利用して (Lewis 1983, 265 / 邦訳 167)」おり、私たちに教えるところは少ないと言わざるをえない。

第二に、たまたま現実世界において物語 f の筋書きどおりに物事が起こっているとしたら、物語 f の中の真理の判定はどう行なわれるのか、という問題がある。これはまったくもってありそうにない仮定的な問題ではあるのだが、虚構における真理の概念をどうとらえるかについて、本質的な問題になる。(Lewis 1983, 265 / 邦訳 167)

想定されているのは次のような状況である。確かに、コナン・ドイルは、シャーロック・ホームズの物語を純粹の虚構として書いたのであった。だが今まったく偶然の一致として、ホームズの物語の筋書きが、私たちの現実世界において、そのすべての細部にわたって完全に実現されていたと想定してみる。つまり、ある現実の人物が「シャーロック・ホームズ」という名前を持っており、この現実世界でコナン・ドイルの書いたホームズ物語にあるとおりの活躍をしていた、と想定するのである。そしてもちろん、コナン・ドイル本人は、この現実世界の人物のことを聞いたことなど全くなかったのである。

この想定の下で、コナン・ドイルの作品の中で使われている「シャーロック・ホームズ」という固有名は、この現実世界のシャーロック・ホームズなる人物を指しているだろうか？ 明らかに、指していない。この人物がたとえ周りから同じ名前で呼ばれていようとも、コナン・ドイルはその人物を指してその名前を使ったのではないからである。ルイスの例示によれば、誰かがイングランドのロンドンを指して「ロンドン」と発話したとき、通常それがカナダのオンタリオ州ロンドンを指すことにならないのと同じである。

この場合、「シャーロック・ホームズは赤毛組合事件を解決した」という文の真偽はどうなるであろうか。この文は、上に述べた提案に従うと、「ホームズ物語において、シャーロック・ホームズは赤毛組合事件を解決した」という文の縮約形と見なされる。そして、先の提案によれば、このオペレーター付きの文は、オペレーターを除いた「シャーロック・ホームズは赤毛組合事件を解決した」という文が、ホームズ物語の筋書きどおりに出来事が起こっているすべての可能世界において真であるとき、またそのときにのみ、真なのであった。

さて、念のために言っておけば、もとより「ホームズ物語において、シャーロック・ホームズは赤毛組合事件を解決した」は、ホームズ物語を読んだ人の皆が真だと判断するはずだから、可能世界に訴える分析も同じ判断に到達しなければならない。

しかるに、上の偶然の一致の想定の下では、

(ア) ホームズ物語の筋書きどおりに出来事が起こっているすべての可能世界の中には現実世界も含まれる。

(イ) コナン・ドイルの使用した「シャーロック・ホームズ」は、現実世界のシャーロック・ホームズを指していない。

(ウ) 「シャーロック・ホームズは赤毛組合事件を解決した」という文は、ホームズ物語の筋書きどおりに出来事が起こっているすべての可能世界において真である、というわけには行かない。なぜなら、現実世界はホームズ物語の筋書きどおりに出来事が起こっている可能世界のうちのひとつではあるが、コナン・ドイルの語ったシャーロック・ホームズが赤毛組合事件を解決したという事実は存在しないからである。現実世界では、たまたま同じ名前を持つ別人が事件を解決したのだった。

(エ) 繰り返しになるが、「シャーロック・ホームズは赤毛組合事件を解決した」という文は、ホームズ物語の筋書きに合致した可能世界群の一つに現実世界がある以上、そのようなすべての可能世界で真という条件を満たすことができない。それゆえ、「ホームズ物語において、シャーロック・ホームズは赤毛組合事件を解決した」という文も、偽と判定せざるをえない。だが、この分析結果はホームズ物語の読者の普通の直観に著しく反している。

ルイスが上の循環疑惑と反直観の結果という二つの難点を避ける方法は、第一に、物語の筋書きの抽出というやり方を捨てる、ということである。筋書きという視点で物語を特定するのではなく、むしろ、物語を「あくまでもある語り手によって個別的状况で語られるものとして考える (Lewis 1983, 265 / 邦訳 167)」ことにする。この手続きによって、ある物語に関し、それがどういいう物語なのかを特定する段階で、虚構における真理という現在探求中の概念を前提しなくてすむようになる。例えば、ホームズ物語は、その筋書きによって特定されるのではなく、コナン・ドイルの書く行為によって特定される。したがって、コナン・ドイルが書いたのと一字一句違わない文章を、誰か別の人物がコナン・ドイルのことをまったく知らずに作成したとしたら、この人物の書いた物語はコナン・ドイルの書いた物語とは別の物語だ、ということになる。この手続きによって、虚構における真理に関する考察の入り口の段階で、その考察主題そのものを利用するはめになることは避けられる。

第二に、これが重大な帰結をもつのだが、「物語を語るということはフリをすることだ。(Storytelling is pretence.) (Lewis 1983, 266 / 邦訳 167)」という着想を導入する必要がある。虚構を、フリをすることの概念と結びつけることは、サールを通じておなじみの着想である。この着想の導入はルイスの議論にとって有益かつ不可欠な効果をもたらすのだが、3.3で確認するように、私たちの関心にとっては、決定的な不都合をもたらす。

フリをするという着想を導入することによって、ルイスは、「物語 f において、 ϕ 」という文の真偽を判定するために参照される可能世界群から、都合よく現実世界を追放することができる。これが導入の効果である。ルイスの内包的オペレーターによる上述の分析は、物語にあるとおりに

に現実世界で物事が起こっているという（ほとんどあり得ない）想定によって挫折させられた。そこで、物語を筋書きによって同定することをやめて語る行為によって同定し、かつ、その語りにおいては語るフリをするというやり方が実行されていると考えるならば、これによって、その語られた事柄はこの現実世界のことではない、ということが好都合に成り立つのである。フリをすることについてのルイスの説明をしてみよう。

「物語を語ることは、フリをすること (pretence) である。物語の語り手は、自分が知識を持っていることがらについて真実を語っていると称している (purport)。語り手は自分の知っているある人物について語ると称しており、典型的には、その人物を通常の固有名を使って指示する。しかし、その物語がフィクションであるならば、語り手はこういったことを本当に実行しているのではない。通常、語り手のフリ行為 (pretence) は、誰かを欺す傾向をほんの少しも備えていないし、語り手が欺く意図を持っているわけでもない。とはいっても、語り手は虚偽の役割を遂行して (play a false part) おり、自分の知っている事実を語るという形式を、本当はそうしていないにもかかわらず、やってみせているのだ。(Lewis 1983, 266 / 邦訳 167-168)」

この説明で分かるように、ルイスは、「フリをする pretence」ことを「真実を語ると称する (purport to be telling the truth)」ことであって、その行為は「虚偽の役割の遂行」という要素を含むと理解する。物語を語る時、典型的には、語り手は自分の知っているある人物について語ると称し、固有名で名指してみせるが、それは、あたかもそうであるかのように振る舞っているだけであって、本当にある人を名指しているわけではない。だから、語り手の語っていることがこの世界の現実ではないということは、語りをフリ行為とみることによって、あらかじめ約束される。つまり、フリをするという概念の中に、言わば暗黙の了解事項として、現実と虚構の区別が組み込まれており、フリとは現実ではないということだ、という了解があらかじめ成立する仕組みになっている。

すると、語り手がある物語を語っているとき、それは語るフリなのだと見なすことにすれば、その語りは現実世界では真にならないという了解も自動的に導入できる。その語りは、ある可能世界において真になるかもしれないが、決して現実世界で真ではない。なぜなら、その語りに登場する固有名は現実世界の存在物を指示するフリをしているだけで、本当は指示などしておらず、それらの語りはすべて現実世界では偽になるか、または真理値を欠くことになるはずだからである。かくして、「物語 f において、 ϕ 」の真偽を判別する上で、 ϕ が真となる可能世界に現実世界は決して入ってこない。

こうして現実世界が混入しない形に分析の枠組みを作り直せば、新たに「物語 f において、 ϕ 」という文の真偽を検討できるようになる。カナメに来るのは、語るフリをするという行為のあり

方を、どのようにして可能世界の設定に反映させるか、という点である。ルイスは次のように述べる。

「私たちが考えなければならない世界は、その虚構作品が、虚構ではなく事実として語られている世界である。物語を語る行為 (the act of storytelling) は、私たちの世界と同じように生じる。しかし、そちらの世界でそれを語る行為は、こちらの世界でそれを語る行為がそう称したら誤りになるようなものなのである。つまり、そちらの世界では、物語を語ることは、語り手が知識をもっているような事実について、真実を語ること (truth-telling) なのである。私たちの世界はこういう世界ではない。というのも、取り扱われているのが本当に虚構作品であるなら、私たちの世界で物語を語る行為は、それがそうだと称するもの〔つまり、真実を語ること〕ではないはずだからである。(Lewis 1983, 266 / 邦訳 168)」

ルイスが、〈語るフリをするとは、真実を語ると称することだ〉という先述の着想に全面的に依拠して、可能世界を設定していることは明らかである。現実世界では物語を語ること (storytelling) である行為が、真実を語ること (truth-telling) になるような可能世界を選び出して、そこでの文の真偽を検討すればよい、と言っているわけである。“storytelling” と “truth-telling” の対比が、真偽の判別への現実世界の干渉を阻む決定的な仕掛けになっている。こうして新しいやり方で可能世界が設定できるようになる。ルイスは、分析0、分析1、分析2という3つの定式を、物語の中での真理を取り扱う枠組みとして提案している。しかし、可能世界に訴える虚構分析の具体的な細部は、本論文の目的ではないので、ルイスの分析の成否の吟味は割愛する¹²。

3.3 フリと可能世界の堂々巡り

以上の一連の手続きは、ルイスの分析には都合な結果をもたらすのだが、サールの議論からルイスの議論へと論点を移した際の私たちの関心からすると、不都合な結果をもたらす。私たちは、言語と世界の関係の側から虚構の語りを特徴付けることによって、サールの導入した水平規約の働きをよく見きわめることを期待したのだった。水平規約は通常の言語と世界との結びつきを停止させるのだから、虚構においては言語と世界が通常結びつき方をしていないということルイスのやり方でとらえることができれば、それは水平規約の特徴づけにもなると期待されたからである。ルイスは可能世界を導入して虚構の語りを特徴付けようとした。だが、物語の筋書きどおりに出来事が起こるといふ考え方では、虚構の語りをうまくとらえることはできないことが判明した。そこでルイスは、虚構を語るとは、語るフリをすることであるという着想を導入し

¹² ルイスの理論は、清塚 2009 の第7章や Sainsbury 2010 の Chap.4 において立ち入って検討されているので、そちらを参照されたい。

て問題を解決することになった。この経緯は循環である。図式化すれば以下の通り。

- 虚構を語るとはどういうことか？
 ……それは、何かを語るフリをすることだ。(サールの回答1)
 ——語るフリをすることとはどういうことか？
 ……言語と世界の通常の結びつきを停止する慣習規約を発動することだ。(サールの回答2)
 ——その慣習規約を発動することとはどういうことか？
 ……「虚構 fiction において真」ということをカナメのところに含む四つの構成的規則 1' ~ 4' を満たすように語るということだ。(本論文の解釈)
 ——虚構において真とはどういうことか？
 ……適切に設定された可能世界のすべてで真ということだ。(ルイスの回答1)
 ——適切に設定された可能世界はどういう世界なのか？
 ……語るフリをすることによって設定される世界だ。(ルイスの回答2)

このルイスの回答2の後で、私たちは、「語るフリをすることとはどういうことか？」ともう一度尋ねるほかないだろう。循環は明らかである。この循環の経路を脱け出すために、物語を語る行為を、話し手側のフリをすることとは別のやり方で特徴付けるグレゴリー・カリーの試みを見ることにする。

4. カリーの虚構論について

4.1 カリーのサール批判

グレゴリー・カリーは、サールと同じく言語行為論の立場から虚構を分析する。だが、サールが、虚構を語ることは語るフリをすることだと見なしたのに対し、カリーは、「フリをすることは虚構にほぼまったく関係がない (Currie 1990, 51)」と言い切る。そして「フリをすること pretence」に代えて、自らの分析の核心部分に「make-believe」という概念を導入する。だが、「pretence」と「make-believe」はどこがどう違うのか辞書で調べてみると、私たちは困惑せざるをえない。例えば、OEDの「make-believe」の説明には、「The action of making believe; pretence, fanciful imagining」とある。「pretence」の説明には、「The action of pretending; make-believe, fiction」とある(イタリックは引用者)。要するに、この2つは辞書的には同義語にすぎない。

カリーとサールの対立点は、議論の表層では、虚構を語ることを発語内行為の一つと見るか否かにかかわっている。サールは、虚構を語るという言語ゲームに関し、「この言語ゲームは発語内行為を遂行するという言語ゲームとまったく同等の水準にあるものではなく、発語内行為を遂

行する言語ゲームに寄生している (Searle 1979, 67 / 邦訳 109)」と述べている。これに対し、カーリーは「私の戦略は、虚構を発話することを、断定と同水準にある発語内行為の遂行として取り扱うこと (Currie 1985, 385)」であると宣言する。

サールが虚構を語ることを発語内行為の一つと見なさない理由は、意味と発語内行為の関係づけの原則に基づいている。サールによれば、基本的に「ある文を発話することによって遂行される発語内行為は、その文の意味の関数 (Searle 1979, 64 / 邦訳 105)」である。例えば、「ジョンは1マイル走に出場できる」という文と「ジョンは1マイル走に出場できるか」という文をそれぞれ発話すると、前者の発話は断定、後者の発話は質問、という異なる発語内行為の遂行になる。この相違は、前者の文が平叙文の形式を持ち、後者の文が疑問文の形式を持っていて、これらの形式の意味が異なることを私たちが知っているゆえに生じる (Searle 1979, 64 / 邦訳 105)。このように意味の違いが発語内行為の違いをもたらす。しかるに、通常の断定として使用されても虚構の中で使用されても、「ジョンは1マイル走に出場できる」という文は、この水準では文の意味に違いはない。意味が違わないなら発語内行為として一類型を成すと見ることもできない。そういうわけで、サールによれば、虚構を語ることはただか断定に寄生しながら断定のフリをすることにすぎないのである。

カーリーは、発語内行為を意味の関数とするサールの考えを関数性原理 (the functionality principle) と呼び¹³、これは全然成立しないと批判する。例えば、「You will leave now」という文は、適当な文脈で発話されたとき、「あなたは出て行くだろう」という断定にも、「出て行って下さい」という要請にも、「出て行け」という命令にもなる (Currie 1990, 15)。使用状況に応じて、同じ文が異なる発語内行為を遂行するのはありふれた事実である。結局のところ、サールの原理は虚構の説明にかぎり、「間違いであるか無関係であるか (Currie 1990, 16)」である。

サールは、例示から見るかぎり、文タイプの意味を念頭に置いて¹⁴ 関数性原理を述べている。他方、カーリーは、使用に即した文トークンの伝える内容を念頭に置いて反論を提出している。両者の議論はそのかぎりでは噛み合っていない¹⁵。両者のこの対立はすれ違いとしか言いようがないが¹⁶、両者の真の相違は、この噛み合わない議論とは別のところにある。サールは、虚構を語る

¹³ Currie 1985 では「決定原理 the determination principle」と呼ぶ (Currie 1985, 385)。批判の骨子は同じである。

¹⁴ ただしサールの意味概念には、著作によって変動がある。Recanati 2003 を参照のこと。

¹⁵ カーリーは、意味 meaning 概念の扱いがたさを指摘しつつ (Currie 1985, 385)、そこには立ち入らないで済ませている。

¹⁶ 私の知るかぎり、カーリー以外の論者は、虚構を語ることが発語内行為の一類型かどうか、という問題に特に関心を示していない。私見では、虚構を組み立ててその中で行為するということは、言語行為の一類型として定立すれば済むという性質のものではない。むしろそれは、ある役割を引き受けるという人間的行為に広く見られる性格、つまり演技的な特性に根ざすと考えられる。このことは、儀式や演劇が宗教や社会生活上しばしば重要な位置を占める事実や、幼児期のゴッコ遊びが発達上重要な意味をもつ事実などから推定できる (田村 2009; 田村 2010)。虚構を語ることが発語内行為の一類型かどうかという議論は、この意味で、人間的行為の全領域を横断して設定されるべき演技性というカテゴリーについて、言語行為と

ことを、語り手側の振る舞いの特徴づけを通じて捉えることが可能だと想定した。つまり、語るフリをするという語り手側の振る舞いを取り出せば十分だと見た。これに対し、カーリーは、語り手と受け手の関係を考慮に入れて、コミュニケーション行為として捉える必要があると考えた。「make-believe」は、辞書的には「pretence」の同義語にすぎないが、カーリーの議論の核心部分では、この考え方の違いを浮かび上がらせるかたちで使用されている。

4.2 コミュニケーション行為とメイクビリーブ

上で見たとおり、同一の文がさまざまな状況で異なる発語内行為を遂行するために使用される。例えば、「ここは暑いね (It's hot in here.)」という発話は、状況によっては「窓を開けてくれ (Open the window.)」という依頼になりうる。カーリーによれば、このとき話し手に生じているのは、「話し手は、自分の発話が命令として理解されることを意図し、話し手のこの意図を見抜くことが文脈によって聞き手に可能になると信じている (Currie 1985, 387)」ということである。虚構の語りも、基本的には同じ仕組みで成り立つ。語り手は、読み手が虚構作品に自分が接していると気づいていると想定し、そのかぎりにおいて虚構を語って行く。語り手は、この文脈では、読み手が語り手の事実描写は現実世界についての断定ではないと受け取ることを当然と見なしている。語り手は何をしているのか？

「語り手は、私たちがフリをすることに、あるいはむしろ、あることを make-believe することに、誘っているのである。というのも、ある作品を虚構として読むことは、一種の内面化された a game of make-believe をすることだからである。(Currie 1985, 387)」

カーリーの考えでは、フリをするのは語り手ではなく、「私たち」つまり読み手の方である。読み手はあることを make-believe する、それはすなわち、内面化された a game of make-believe にたずさわることだ、と言われる。「make-believe」という語は訳しにくい、「a game of make-believe」は容易である。これは「ゴッコ遊び」である。すると「make-believe」は、「ゴッコ遊びにおけるように、あえて事実ではないことを事実であるかのように信じることにする」という意味と見てよい。今後、「make-believe」は、冗長を厭わず、「ゴッコ遊びにおけるように信じる (make-believe)」ないし「ゴッコ遊びとして信じる (make-believe)」というように原語を付して説明的に表記することにする。

作品を虚構として読むということが「内面化されたゴッコ遊び」であるというのは、具体的に言えば、「吾輩は猫である。名前はまだない。」という文を読んだときに、この文を発話している猫がいるかのように信じることにして、先を読み進めるということである。「どこで生れたか頓

いう一領域の下位区分での設定の是非を問うかたちになっており、問題の水準を見誤った議論のように思われる。

と検討がつかぬ」と続くから、この猫には生まれたところの記憶は無いのだ、というように。ただし、この、猫の語りを読むゴッコ遊びをするときは、同時に、その猫が現実世界にいるわけではないということもまた、参加者には了解されている。これはちょうど、ママゴト遊びをする幼児が、泥団子を饅頭として扱いつつ、同時にそれが泥団子であることを決して忘れはしないのと同じことである。このゴッコの設定と現実との二重のあり方は、何かのフリをすることにおいて生じるフリと現実の二重性と同じであり、また、フリによって設定される可能世界と、この現実世界とを、区別して扱うことができるということも同じことである。カーリーがサールやルイスと違うのは、コミュニケーションの局面を中心に考えようとするところだけである。

「コミュニケーションにおいて虚構を考えるならば、書き手側のフリ行為という仮説は、そのコミュニケーションがどのようにして成立するかを説明する上で何の役割も果たさない、と私は考える。(Currie 1985, 387 強調は引用者)」

これが、カーリーがサールの説を拒否する理由である。必要なのは、虚構を語って、それがそのように理解される、という一連のコミュニケーションのあり方を特徴づけることである。このとき、

「求められているものは、テキスト内の言明に読み手がどんな態度をとることを書き手側が意図しているのかを、読み手が理解する、ということである。虚構の場合、意図されている態度は、ゴッコ遊びにおけるように信じる (make-believe) という態度である。虚構の書き手は、読み手がテキストを、単にゴッコ遊びにおけるように信じる (make-believe) というだけでなく、さらに書き手側のそういう意図を読み手が認知する結果として、読み手がそのように信じる、ということをも意図する。その意図の認知が“発語内的な了解”を保証する。そういうわけで、書き手が或る複雑な意図を持つことは決定的に大事だが、書き手がいかなるフリをすることも要求されてはいないのである。(Currie 1985, 387 強調は引用者)」

カーリーはこのように、ゴッコ遊びにおけるように信じる (make-believe) という態度を、虚構によるコミュニケーションの成り立ちを特徴付けるために導入している。虚構を語り、それを受け取る (聞く、読む) ことが成り立つのは、コミュニケーション意図の受け渡しにおいて、ゴッコ遊びにおけるように信じる (make-believe) という態度が本質的にかかわることによってである。カーリーの分析を以下で検討しよう。

4.3 虚構の語りとコミュニケーション意図

カーリーが、グライスやストローソンのコミュニケーション論的意味論を前提にして (Grice

1957; Strawson 1979)、虚構的な発話に与える形式的な説明は次のとおりである。

「(D₀) 話し手Uにおける文Sの発話は、下記のとおり、また下記のとおりに限り、虚構的 fictive である。

記

話し手Uは、文Sを、次のことを意図しつつ発話する。すなわち、

聞き手が、(1) 文Sが命題Pを意味すると認識し、

(2) 文Sが命題Pを意味することを話し手Uが意図していると認識し、

(3) 話し手Uが命題Pを聞き手がゴッコ遊びにおけるように信じる (make-believe) よう意図していると認識し、

(4) 命題Pをゴッコ遊びにおけるように信じる (make-believe) こと。

話し手Uはさらにまた次のことも意図して発話する。

(5) (2) が (3) の一つの理由であり、

(6) (3) が (4) の一つの理由であること。(Currie 1990, 31)¹⁷

条件の趣旨を解説する。まず、条件(1)の趣旨は、話し手Uの口にした文Sが事柄P¹⁸を意味していると聞き手が分かる、ということ。つまり、聞き手はその発話を理解するだけの言語能力を持っているという条件である。

条件(2)の趣旨は、聞き手が、話し手Uの言いたいことが事柄Pであると間違いなくとらえる、ということ。言い換えれば、聞き手は、たんに文Sを理解する能力があるだけではなくて、その時そのコミュニケーションの場で、話し手Uの言いたいことがまさにその文Sの意味Pであると見抜く、ということ。コミュニケーションがピンぼけにならず、相手の言いたいことを正し

¹⁷ Currie 1985 では、以下の通り、虚構の語りの定義 (F) として、少し簡略な形式が与えられている。

「Uを話し手とし、 ϕ を人物の特徴に関する変数であるとし、Pを命題とする。

(F)

UがPを発話するときに虚構を発話するという発話内行為を遂行しているのは、次のような ϕ が存在する時、またその時にかぎる。すなわち、 ϕ という特徴を備えている任意の人物が、

(1) Pをゴッコ遊びとして信じることにし、

(2) Uの(1)なる意図を認知し、

(3) (2)なる認知を(1)をするための理由とする

ということを意図してUがPを発話する、そのような ϕ が存在する時、またその時にかぎる。(Currie 1985, 387)

この定式は、聞き手を選び出す条件 ϕ を含むかたちで提示されているため、虚構の語りの定義としては扱いにくい。だが、核心部の条件(1)～(3)は分かりやすいので、参考として挙げておく。

¹⁸ 「命題P」を「事柄P」と言い換えたのは、日本語の通常の用法として、「命題」が言語的な構成物を、あるいはむしろ、端的に何らかの文を連想させるのに対し、「事柄」は事実の側の事情を思わせるからである。「命題」は文の表す何モノかなのだから、解説においては「事柄」で置き換えることにした。

く焦点にとらえる形で成立している、という条件である。

条件(3)の趣旨は、事柄Pを聞き手がゴッコ遊びにおけるように信じる (make-believe) ということ、話し手Uが意図していると聞き手が見抜く、ということ。つまり、話し手側から言えば、話し手が虚構を語っているのだということを聞き手が見抜くように話し手側が意図する、ということである。

条件(4)の趣旨は、聞き手が事柄Pをゴッコ遊びにおけるように信じる (make-believe) ということ。

以上の(1)～(4)を意図して話し手Uは文Sを発話する。(5)(6)は、追加の条件である。

条件(5)は、話し手Uの言いたいことがまさにその文Sの意味P¹⁹であると聞き手が見抜いた[条件(2)]ということの帰結として、聞き手側に、事柄Pを話し手Uがゴッコ遊びにおけるように信じて (make-believe) 欲しがっているという洞察が成立する[条件(3)]、ということ、話し手が意図している、という条件である。これは入り組んでいるので、以下の(a)～(c)のとおり、簡略化しながら分解してみる。

(a) 聞き手は話し手UがPということと言いたいのだと分かる[条件(2)]。だが、(b) Pと言いたいのだと分かったときに、そう分かった結果として、話し手は決して現実にPだと信じて欲しいのではなく、ゴッコ遊びにおけるように信じて (make-believe) 欲しいだけなのだ、ということも聞き手に分かる[条件(3)]。(c) この(a)(b)のように聞き手側に認識が成り立つように、話し手Uが意図する。この(a)～(c)が条件(5)の構成部分である。

具体的に言うと、「吾輩は猫である。名前はまだない」という文を読んだとき、語り手の言いたいことが字義通りに読み手に分かり[条件(2)に対応]、それが分かった瞬間に、猫が話すわけではないからこれは虚構なんだ、と読み手が分かる[条件(3)に対応]、というように漱石が意図する、ということである。条件(5)は、したがって単純化すれば、話し手が言おうとした事柄Pが、読み手がゴッコ遊びにおけるように信じる (make-believe) 中身を成すという条件であり、話し手の意図からずれたことを読み手が受け取ってしまうといった、コミュニケーション上の失敗を排除する。

なお、猫が話すわけではないというのは読み手側の背景知識であるが、話し手はこういう背景知識を当然期待するし、期待してかまわない。このように常識が参加してはじめて(2)が(3)の理由となるのだから、(5)にあるとおり、(2)は(3)の「一つの理由」にしか過ぎないのである。

条件(6)は、Pをゴッコ遊びにおけるように信じて (make-believe) 欲しいと話し手Uが思っていると聞き手が洞察した[条件(3)]ということの帰結として、聞き手においてPをゴッコ遊びにおけるように信じる (make-believe) ということが現実に成立する[条件(4)]、とい

¹⁹ 「意味P」「命題P」「事柄P」は、ほぼ同じモノを言い表していると理解されたい。

うように話し手が意図する、という条件である。この条件も、虚構を受け渡すコミュニケーションが、話し手の意図に沿って成立しない事例を排除するものである。例えば、話し手は現実の話をしているのだと聞き手は（誤って）思ったが、自分としてはとりあえずゴッコ遊びにおけるように信じておく（make-believe）ことにした、という場合が排除される。これは、結果的には同じ事柄が虚構として受け取られるのだが、コミュニケーション意図が正常な伝わり方をしていない。

なお、条件（6）において（3）が（4）の「一つの理由」にしか過ぎないのは、ゴッコ遊びに参加するには、誘われていると分かるだけでは十分でなく、誘われた側の参加しようという気持ちもまた必要だからだと思われる。具体的に言うと、「吾輩は猫である。名前はまだない」という文を読んで、ああ作り話なんだと思った〔条件（3）に対応〕としても、教師の家で飼われている猫の述懐を聞くゴッコ遊びにただちに参加することになる〔条件（4）に対応〕わけではない。読み手は、そんなゴッコ遊びに参加する気分ではないかもしれない。閑人の無駄話を楽しもうという気持ちが無いと、作者の意図は分かっても、このゴッコ遊びへの参加は成立しないにちがいない。

カリーのコミュニケーション論的分析は以上の通り周到なものだが²⁰、注意すべきことは、この分析では、話し手の意図がもっぱら重視されており、聞き手の状態は話し手の意図のターゲットとしてのみ扱われているということである。聞き手の背景知識やゴッコ遊びへの参加意志といったものの介在は、追加の条件を立ち入って解釈すれば浮かび上がって来るものの、定式に表立って組み込まれてはいない。分析の核心は、あくまでも、話し手が、命題Pをゴッコ遊びにおけるように聞き手が信じる（make-believe）ことを意図して語る、ということである。

以上のカリーの定式は、虚構作品のありうる様態のすべてを覆ってうまく成立するというわけではない。カリー自身がさまざまな反例を構成して、定式の補足を試みている。それを次に見る。

4.4 カリーの定式への反例

第一に検討されるのは、ゴッコ遊びにおけるように信じる（make-believe）ことを聞き手に求める話し手側の意図は、虚構のコミュニケーションの必要条件であるのか、ということである。カリーによれば、ダニエル・デフォーは、『ロビンソン・クルーソー』を書いたとき、その話を人々が端的に信じることを意図したのだそうである（Currie 1985, 388；Currie 1990, 37f.）。すると、定式D0の条件（3）と（4）が成立しないから、カリー説によればデフォーの発話は虚構的 fictive ではなくなる。すると、『ロビンソン・クルーソー』は虚構作品ではないということに

²⁰ カリーは以上の定義（D0）に加えて、発話の意味が字義通りでなく逆説や比喩のような場合に関する定義（D1）、および、発話がある人々には事実として、別の人々には虚構として受け取られるといった二重性を伴う場合に関する定義（D2）を付け加える。しかし、議論の核心部は（D0）に現れているので、それらは割愛する。

なってしまう。これは、常識的には受け入れられない結論のように見える。

この問題に対する扱いは、カーリー 1985 とカーリー 1990 とで少し異なっている。カーリー 1985 での扱いは単純である。「たんに作り手の意図のみによって虚構ではないものとなる作品に、虚構という位置づけを付与する力が、読み手側の公衆にある (Currie 1985, 388)」ことを、カーリーは認める。つまり、『ロビンソン・クルーソー』のような場合は、話し手の意図よりも読み手の受け取り方を優先して、虚構作品と見なす方が適切だ、ということである。より正確には、

「虚構というカテゴリーの“核心”は、作り手の発語内意図によって定義されると言うべきだが、テキストに対してゴッコ遊びにおけるように信じる (make-believe) 態度を採用するという、共同体の支配的な傾向によって定義される“二次的な”虚構作品という分類項目も許容すべきである、と私は考える。(Currie 1985, 388)」

これに対し、カーリー 1990 は、虚構であること (being fiction) と虚構として取り扱われること (being regarded as fiction) を分けて考える必要があると言う。デフォーが自分の物語を大衆がそのまま信じる (believe) よう意図していたのなら、彼の語りは嘘をついている発話 (a lying utterance) であることをまぬがれない。文学作品を書くことが嘘をつくこととは別ものであることは維持されねばならない。とはいえ『ロビンソン・クルーソー』は虚構作品ではなく、むしろ初っ端からばれてしまった嘘なのだと言ったとしても、読者大衆が態度を変えるはずもない。人々は、ゴッコ遊びにおけるように信じる (make-believe) という態度でその物語に接することを止めはしない。そして「確かに、その作品を読む一番有益なやり方は、それがあたかも虚構作品であるかのように (as if it were fiction) 読むということ (Currie 1990, 37. 強調は原文)」であろう。そういうわけで、カーリー 1990 は「擬似虚構作品 pseudofictions」というカテゴリーを立てる。『ロビンソン・クルーソー』は、読者大衆の認定によって虚構作品と認められる (ただし“二次的な”) のではなく、虚構作品とよく似ているけれどそうではない擬似虚構作品に分類される。

「それゆえ、虚構的作品にかなりよく似た作品のカテゴリーがあるのだ。それを擬似虚構作品と呼ぶことにしよう。このカテゴリーに分類されるかどうかは、あたかも虚構作品であるかのようにその作品を読むという現実の行動が広い範囲で存在しているかどうかによって決定される。(Currie 1990, 37)」

『ロビンソン・クルーソー』はあくまでも虚構ではなく、虚構として取り扱われているにすぎない、というのがカーリー 1990 の分類の趣意である。読者側の受容姿勢によって分類が為されるという点では、カーリー 1985 とカーリー 1990 とに違いはない。しかし、カーリー 1985 からカーリー

1990 に到って、話し手の意図こそが虚構であるか否かを決めるという方向に、カーリーが態度をより固めた感がある。そこに見られるのは微妙な違いではある。だが、語り手側の制作意図を重視するか、受け手側の姿勢を重視するかは、虚構の語りというヒト社会一般に見られる活動様式をどのように特徴づけて理解するか、という一般的な問題につながっている。この点については結びでふれることにする。

カーリーが第二に検討するのは、話し手側の虚構制作の意図は、虚構のコミュニケーションの十分条件であるのか、という問題である。この問題に関してはカーリー 1985 とカーリー 1990 の間に扱いの本質的な違いはない。扱われるのは、二つの仮説的な例である。どちらの例も、話し手側の意図は虚構を語ること、つまり聞き手にゴッコ遊びにおけるように信じる (make-believe) ことを求めるものとなっているのだが、結果として成立した語りが虚構かどうか疑問が生じる、という形になっている。

ジョーンズ例： 貧乏な物書きのジョーンズが何者かの手稿を発見した。彼はこれが今まで知られていない虚構作品だと考えた。彼は言葉遣いを適宜変えながら実質的に手稿の内容を保存して一作をものし、自分の創作として発表した。ところがジョーンズは誤っており、その手稿は正確な事実報告であることが判明した。このとき、ジョーンズの創作は、虚構制作の意図にもとづいて成立している。つまり、彼は自分の書いたものを読者がゴッコ遊びにおけるように信じる (make-believe) よう意図していた。すると、カーリーの定式によれば、ジョーンズの作品は虚構であることになる。だが、この分類は受け入れがたいように思われる。(Currie 1985, 388 ; Currie 1990, 43-44)

スミス例： スミスは、実生活で怖い体験をしたが、それを完全に抑圧して生きてきた。あるときスミスは、一つの物語を作った。それはかつての怖い体験をなぞったものだったが、スミス本人はそれが自分の創作であると考えていた。抑圧された無意識が何らかの仕方で情報を供与することによって物語が成立したのだが、スミス本人はこれに気づくことが無かったのである。このときスミスの語りは虚構制作の意図によっているので、物語は虚構ということになるが、そう考えるわけには行かないように思われる。(Currie 1985, 388 ; Currie 1990, 45)

この二つはいずれも人工的な例である。また、虚構と認めがたいという結論にもやや疑問が残る²¹。だが、例としての趣旨ははっきりしている。両例とも、事実とよく合致する語り話し手の

²¹ スミス例は虚構と見なしてかまわないような感じが強い。ジョーンズ例は、剽窃が関与しているため、創作と認めることは無理がある。すると、そもそも創作ではなく資料の引き写しにすぎず、その資料が事実報告であったということになるので、ジョーンズの意図がどうであれ、書かれたものを虚構とは認めにく

虚構制作の意図にもとづいて提示されたとき、その語りは虚構と認められるのかどうか、という問題提起である。この問題提起は、歴史小説における事実との合致とは別の問題である。通常、歴史小説は何らかの史料にもとづきながら、史料に述べられていない人間心理や事件の細部を語って行く。このような語りが虚構に分類されるのは、作者が、史料に無い事柄をゴッコ遊びにおけるように読み手が信じる (make-believe) ことを求めて語るからである。この場合はカリーの定式を無理なく適用できる。だが上の二例は、事実と合致した事柄をゴッコ遊びにおけるように信じる (make-believe) ことを求めるかたちになっており、カリーの定式の子想していない事例になる。

カリーはこの二例を、次のような場合と対比して考へている。ある歴史小説の作者が史料に無い事柄を想像して書いた。だが、想像した部分がすべて史実に合致していることが偶然判明した。この場合、事実と合致した語りが虚構制作の意図をもって提示されている。その意味では上の二例と同じである。ところが、この歴史小説は依然として虚構に分類されると思われる。

この違ひは、端的に言つて、事実とのつながり具合にある。ジョーンズ例やスミス例の場合には、反事実的な状況を想像して問題の事実情報のいずれかの部分が一部異なっていたと仮定すると、語られた内容もこの変化に応じて異なるものとなると想像される。手稿の一部が異なっていたり、体験の一部が異なっていたりすれば、当然それに応じて内容がジョーンズやスミスの語りに反映されるからである。ところが、たまたま史実に合致してしまった歴史小説の場合には、史実が異なるあり方をしていたという反事実的仮定の下においても、小説家の想像力にもとづく部分は変化するはずはない。もともと史実を参照せず、もっぱら語り手の想像によって作られているからである。すなわち、ジョーンズ例やスミス例は、反事実的仮定の下でも事実に依存するのに対し、歴史小説の例ではこの依存が起らない。この歴史小説が事実と合致してしまったのは、たんなる偶然の結果に過ぎないからである。(Currie 1990, 45-48)

こうしてカリー 1990 では、虚構作品の定義に一つの追加が行なわれる。

「私たちは、次のように言わねばならない。ある作品が虚構であるのは、(a) その作品が虚構制作の意図の産物であり、かつ (b) その作品が真であるならば、たかだか偶然的に真であるとき、またその時に限る。」

この (b) の条項の追加は、話し手側のコミュニケーション意図によって或る語りが虚構かどうか一義的に決定できるわけではない、という事情を示している。語りと事実とのつながり具合

いという結論に、ある程度の真らしさがある。だが、この判断には「剽窃」「創作」といった別系統の概念が介入している。語りにおけるジョーンズの意図を純粹に抽出すれば、そして意図によって虚構であるか否かを判断するという立場を堅持するつもりならば、ジョーンズの語りを虚構と見なしても差し支えない、という感じは否めない。

がこの決定には関与する。

結局、カーリーは、自分の定式に対する反例を検討した結果、話し手の意図が虚構のコミュニケーションの十分条件なのかどうかの検討では、事実とのつながり方の関与を導入し、必要条件なのかどうかの検討では、読み手の関与を導入したかたちになっている。虚構の語りをコミュニケーションの観点から見れば、当然ながら、読み手の態度や事実との対応関係を無視することはできないのである。

5. むすび

読み手側の態度や事実との対応関係は、或る語りが虚構であるかどうかを正確に分類するための追加の条件であるにとどまらない。もっと重要な意義をカーリーの虚構論において担っている。最後にその点を確認しておこう。

カーリーの虚構論においては、物語において真ということと、読み手側の態度とが、本質的な結びつきを持つかたちになる。すでに見たように、虚構作品を読むとき、私たちはある種のゴッコ遊びをするように誘われている。つまり「虚構作品はゴッコ遊びを生み出す (Currie 1990, 71)」のである。例えば、『バスカヴィル家の犬』と『吾輩は猫である』は、どういったことをゴッコ遊びにおけるように信じるのか、という点で違う。漆黒の巨大な犬が出現するダートムアの殺人事件を信じることにするのか、明治の東京で飼い猫が人間観察を語るということに信じることにするのか、という違いである。作品はそれぞれが固有のゲームを生み出している。というのも、「異なった虚構作品は、何が虚構的に真であるのかという点について異なっているのであり、それゆえ、何をゴッコ遊びとして信じることにしなければならないのか (what is to be made believe) という点について異なっているのだからである。(ibid.)」

こうして、読み手は虚構作品を読むことを通じてその作品の作り出すゴッコ遊びに参加する。殺人事件が解決される顛末に立ち会ったり、首縊りの力学なる珍妙な学術講演を拝聴したりする。私たちは物語を受け取るとき、その「テキストが現実に生じた出来事の説明であると、ゴッコ遊びとして信じる (make believe) ののである。(Currie 1990, 73)」

これだけのことならば、すでに述べられてきたことの再説明にすぎないのだが、カーリーはここでさらに次のように強調しつつ確認している。

「虚構的な物語をゴッコ遊びにおけるように信じる (make-believe) とは、たんにその物語が真であるとゴッコ遊びとして信じる (make-believe) だけではない。そうではなくて、その物語が事実として語られているということを、ゴッコ遊びとして信じる (make-believe) ののである。(Currie 1990, 73 強調は原文)」

「事実として語られている」というのは、ルイスの言い方で言えば、その物語を語ることが“ 真実を語ること truth-telling” になるような状況を私たちが受け入れる、ということである。カーリーは、ルイスと同様に、「物語が事実として語られている」という特徴づけを利用して、虚構作品は現実世界においてはたかだか偶然的に真となるすぎないという前節末の条件を、物語世界における言明の真偽を判別する過程に組み込む。しかし、カーリーはルイスと異なり、可能世界という真理の分析装置を導入するのではなく、物語を事実として語る語り手を導入する。すなわち、「私たちはテキストを、その出来事について知っている誰かの生み出したものだと見なければならぬ (Currie 1990, 73)」と言うのである。

しかし、物語の作者は私たち読者をゴッコ遊びに誘う話し手である。作者とは、自分の語っている事柄を事実として語るのではなく、ゴッコ遊びにおけるように信じる (make-believe) ことを求めて語る存在である。だから、「その出来事について知っている誰か」とは、作者ではありえない。そうではなくて、その「誰か」とは、物語の世界の住人として、私たちにその世界でおきた出来事を語り聞かせる存在である。単純化すれば、コナン・ドイルではなくワトスン、夏目漱石ではなく名前不詳のある猫ということになる。こうしてカーリーの虚構論では、物語において真である事柄とは、物語の世界の住人であって私たちにその物語世界への通路を拓いてくれる「信頼できる語り手 a reliable teller (Currie 1990, 73)」の信じていることとして定義される。

「私たちは、作者が自分の言っている事柄を本当に信じているわけではないこと、少なくとも、それらの事柄の全部を信じているわけではないことを知っている。私たちが行なうゲームにおいて、私たちは、それらの事柄を信じている語り手が存在し、その信念が信頼できるということを、ゴッコ遊びとして信じる (make-believe) ののである。(Currie 1990, 73)」

この仮想の語り手は、私たち読者に向けて、作品中の出来事が事実として起こっている世界から語りかけている。私たちは、この仮想の語り手がその世界の事実として信じていることがいたい何であるのかを、その語りから解読して行く。物語における真理は、この解読作業を通じて組み立てられたその仮想の語り手の信念体系として、私たちに与えられる。「虚構作品において真であることは、この語り手が信じていることなのだ。(Currie 1990, 75)」

このように虚構における真理を他者の信念体系の解読になぞらえて規定することは、コミュニケーション行為として虚構の語りをとらえるというカーリーの基本的な構えによく適合している。作者は、ゴッコ遊びにおけるように信じる (make-believe) ことを読み手に求めて語る。読み手は、作者がゴッコ遊びにおけるように信じる (make-believe) ことを求める世界が、どのような世界であるのかを、仮想の語り手の信念体系として解読することによってとらえる。だがこのとき、その虚構の世界がどのような世界であるのかを作り上げるのは、作者側の虚構制作の意図というよりは、読み手側の解読の行為である。

ゴッコ遊びは誘う側と誘われる側とに何らかの共通理解が醸成されて初めて成り立つ。「吾輩の主人は滅多に吾輩と顔を合せることがない。職業は教師ださうだ。学校から帰ると終日書齋に這入つたぎり殆ど出て来る事がない。²²」という文章の意味が理解できるとしても、これが猫による人間の観察報告であるということをゴッコ遊びとして了解していなければ、コミュニケーションは失敗に終わる。この十数行後で「吾輩は猫ながら時々考へる事がある」という一節に出くわしたとき、わけが分からなくなるはずである。

このわけの分からなさは、母親がバナナを手にとって顔に近づけ、「もしもし」という音声を発する現場に、幼児が生まれて初めて立ち会った際のわけの分からなさと同様のものである。幼児は「このバナナは電話機なんだ!」という了解に達しなければならない (Leslie 1987; Leslie 1994)。『吾輩は猫である』の読み手は、「この猫は話すんだ!」という了解に達しなければならない。ゴッコ遊びにおけるように信じる (make-believe) という心的能力が、話し手側の虚構制作の意図が成立する前提である。現実とは別の水準に虚構の世界が成立するのは、この能力を仲立ちにして、言葉や身振りの発し手と受け手が協力することによってである。

言い換えれば、話し手と読み手が共通に踏まえている虚構生成の作法によって、虚構は語られ、解釈され、虚構的世界が形成される。ゴッコ遊びを成り立たせている認知と行動の原理は、話し手側にも聞き手側にも共通している。その原理は、虚構を語る言語行為の構成的諸規則の前提ないし基盤になっているものである。ちょうど、他者の発話が事実について真であるということの直観が、通常の言語コミュニケーションにおいて「意味が分かる」ということの根底にあるのと同じように、他者の発話が或る虚構において真であるということの直観が、虚構を構成するコミュニケーションにおいて「意味が分かる」ということの根底にある。現実において端的に真であるということが人間の世界理解において根源的であるのと同じように、虚構において真であるということは、人間の世界理解において根源的であると考えられる。可能世界という分析装置を適用するにせよ、他者の信念体系の解読メカニズムを応用するにせよ、私たちが虚構の語りの分析を通じてあらわにしようとしているのは、ヒトの根源的な能力の一つとしてのゴッコ遊びの原理である。

参考文献表 (著者姓のアルファベット順)

- Currie, G. (1985). What is Fiction? *The Journal of Aesthetics and Art Criticism*, Vol.43, No.4, pp.385-392.
 Currie, G. (1990). *The Nature of Fiction*. Cambridge: Cambridge University Press.
 Grice, P. (1957). Meaning. In Paul Grice, *Studies in The Way of Words* (pp.213-223). Cambridge, Mass.: Harvard University Press. 1983.
 Hoffman, S. (2004). Fiction as action. *Philosophia*, Vol.31, Numbers 3-4, pp.513-529.
 清塚邦彦 (2009) 『フィクションの哲学』 勁草書房.

²² 『漱石全集』 第一巻6頁。

- Leslie, A. (1987). Pretence and Representation: The Origin of "Theory of Mind". *Psychological Review*, Vol.94, No.4, pp.412-426.
- Leslie, A. (1994). Pretending and Believing: Issues in the theory of ToMM. *Cognition*, 50, pp.211-238.
- Lewis, D. (1983). Truth in Fiction. In David Lewis, *Philosophical Papers Volume 1* (pp.261-280). Oxford University Press, 1983. (邦訳「フィクションの真理」『現代思想』1995年、第23巻04号 pp.163-179.)
- 夏目漱石 (1905-07)『吾輩は猫である』『漱石全集 第一巻』所収 岩波書店 1993.
- Recanati, F. (2003). The Limits of Expressibility. In Barry Smith (ed.), *John Searle* (pp.189-213). Cambridge: Cambridge University Press. 2003.
- Sainsbury, R. M. (2010). *Fiction and Fictionalism*. London: Routledge.
- Searle, J. R. (1969). *Speech Acts*. Cambridge: Cambridge University Press. (邦訳『言語行為 言語哲学への試論』勁草書房 1986.)
- Searle, J. R. (1974/75 [1979]). The logical status of fictional discourse. In John R. Searle, *Expression and Meaning* (pp.58-75), Cambridge: Cambridge University Press. 1979. (邦訳「フィクションの論理的身分」ジョン・R・サール『表現と意味 言語行為研究』誠信書房 2006、pp.95-123.)
- Strawson, P. F. (1979). Meaning and Truth. In Ted Honderich and Myles Burnyeat (eds.), *Philosophy As It Is*, (pp.515-540). Harmondsworth: Penguin. 1979.
- 田村均 (2009)「フリ・まね・演技の行為論的分析 ——ゴッコ遊びの認知と行動——」『名古屋大学文学部研究論集』哲学 55, pp.1-30.
- 田村均 (2010)「自己犠牲的行為の説明 ——行為の演技論的分析への序論——」、日本哲学会編『哲学』第 61 号, pp.261-276.

Abstract

Fictional Discourse and Speech-Act Theory

Hitoshi Tamura

John Searle argues in his seminal paper of fictional discourse that the author of a work of fiction pretends to perform a series of illocutionary acts. He does not make it very clear, however, how one could make a pretended performance of an illocutionary act, e.g. an assertion: he does not tell us what else should be done in order to make a pretended assertion in addition to uttering an assertive sentence. The analysis of truth in fiction put forward by David Lewis may seem to give a plausible account of the meaning of fictional discourse; but his theory also contains the concept of pretence as a primitive notion of its explanatory components. Gregory Currie criticizes the Searlean pretence theory of fiction and advocates a communicative approach to the problem of fictional utterance. He introduces the idea of make-believe instead: the author of a fiction intends that the audience make believe her story. In his communicative approach it seems to be taken for granted that we know what it is to induce someone to make believe something and how it can be carried out by a speaker. Pretence or its equivalent, make-believe, appears in these theories as a fundamental but unexplained frame of mind that constitutes the essence of fictional discourse. It is suggested that pretence or make-believe may be a primitive equipment of human mind like belief or truth inasmuch as storytelling and playacting can be seen everywhere in human life.